

## <特集随想>外間先生の言葉

著者	鮎澤 浩二
雑誌名	日本文学誌要
巻	51
ページ	117-118
発行年	1995-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019808">http://hdl.handle.net/10114/00019808</a>

# 外間先生の言葉

「外間」。この名前を初めて見たのは、履修要項の中でであった。正直言って何と読むのかわからず、「そとま」かな？　と思っていた。この先生がどのような研究をされ、ましてや沖縄文学の第一人者であることを知ったのは、それからかなり後になってからである。専門科目の「文法論」で初めて「ほかま先生」であることを知り、先生のお顔を拝見した。

教師が教えるのは、その専門分野の学問だけではなく、その人間性であり、その人自身の人柄でも有り得るのだと思う。専門知識だけあれば、専門書と称する書物があり、それを読めばある程度は自分のものにできよう。しかし、教えを授ける側と教えを受ける側が同じ空間で顔を突き合わせるにより得られるものは、むしろ後者である割合が高いようにも思える（注、決して専門知識を軽く考えているのではない）。私は外間先生から、まさにこの後者の教えを強く受けた者であると言えよう。

四年生の教育実習の際、偶然私の指導教官となられたのが外間先生であった。「文法論」の講義の時は、必修科目ということもあり、近く

鮎澤 浩二

で接触する機会がなく、というよりも私が愚学生でもあったため、外間先生に対しては「沖縄文学の第一人者」という認識しかなかった。実習の事前ガイダンスの時に、外間先生が指導される十名前後の学生を教室に集められた。その時、いつものように穏やかな口調で諸注意をされ、その後で「しっかりやりなさい」と優しく言われた。そして、「研究授業の日が決まったら連絡するように」と付け加えられた。

実習が始まって二日目。突然、実習校の校長先生から呼び出され校長室に行くと、何と外間先生がニコニコしながら校長先生と話されていた。私自身、何が何だかよくわからずにきょとんとしていると、「様子を見にきました。しっかりとがんばってますか？」と言われ、教材として扱っている作品のこと、授業のこと等を聞かれた。まさか、わざわざ先生が激励のために尋ねて来られるとは思ってもしなかっただけに、その時は本当に嬉しく、不安だらけの実習に一つの光が差し込んだような心持ちになった。余談ではあるが、実習校の校長先生は、外間先生のことを書物を通してよく存じておられたそうで、後日、私に「いやあ、私の方が恐縮してしまいましたよ。まさか、あの外間先

生がこのような形で尋ねて来られようとは思っていませんでした。

鮎澤君は本当に良い先生に恵まれましたね」と言われ、何だか私が褒められているような気持ちになってしまい、思わず頭をかいてしまったことを覚えている。約二週間が過ぎ、いよいよ研究授業当日となった。

外間先生は、私の授業を初めから（それも私が教室に着く前に既に教室に來られており、更に驚いたことに生徒と談笑しておられた）参観していただき、最後までしっかりと聞いて下さった。授業後、講評をしていただき、その中で「君はいいよ。笑顔を絶やさずに、いつもニコニコしながら生徒を見ている。生徒の顔を見ながら本当に楽しそうに授業をしていた。それが一番だよ。色々な生徒がいるのだから、押し付けるのではなく、伸び伸びと考えさせるのがいいのだよ」と。

この言葉はいまだもって私の心の中に響いており、外間先生からいただいた贈りものとして心にとめている。あれから十年、私は卒業と同時に高校の教師となり、現在に至っている。できの良い学生ではなかったのと同様に決してできの良い教師ではなく、日々奮闘の繰り返しである。己の未熟さを痛感するあまり、それを部活（ラグビー）の部員にあたることにより紛らしているというどうしようもない教師でもある。しかし、そんな中で唯一自信が持てるのは、あの外間先生からいただいた言葉である。よく生徒から「鮎ちゃん（注、なぜか生徒は私をいまだに先生とは呼ばない）は、いつもニコニコしているから一度位怒った顔を見たい」などと言われる。なるほど、考えてみると生徒に手をあげたことはないし、よほどのことがない限り怒らない。時には真剣に語りかけ、時には諭したりもする。けれども、教師という立場を逆手にとって、生徒を縛りつけたり、自分の体面を優先し生徒の人格を無視したことはない。外間先生からいただいた言葉。

その意味するものは、教師は人間性が大切であるということ。そして、自分が楽しく（これが先生の言われた「ニコニコしながら」であろう）授業に臨むことの大切さであろう。確かに、自分が作品を楽しまなければ、生徒が作品を読み興味を持つはずがなかろう。まさに、教師としてのスタンスを外間先生から教えられたのである。

教育現場での諸問題は絶えることがない。校内暴力・教師の体罰・いじめ等、人間関係から生じる問題は、一歩間違えるとその当事者の人生そのものを左右するほど大きなものとなることもある。教師の持つ役割は、教科書を指導要領の目的に沿って教えることだけではなく、生徒との人間としての接点を持ち得ること。つまり、押さえつけることによる画一化された標準サイズ人間の作成ではなく、個々の可能性の芽を見い出して、それを生徒自身に気づかせることが役割であろう。そのために必要なスタンス、それが外間先生の言葉の中に見いだせたのである。

「外間ゼミ」の学生でもなかった私が、外間先生についての思い出を書くこと自体が失礼なことであることは充分承知している。しかし、どうしても外間先生から受けた御恩を記す機会が欲しくて筆を執った次第である。外間先生からすれば目にとまるような学生ではない、その他大勢の中の一人のような私ではあるが、その他大勢の中にも先生から多大な影響を受けた学生は数多くいることであろう。これから外間先生から贈られた言葉を大切にしながらいきたい。

（あゆざわ こうじ・一九八五年卒）